



空気も水もお米も美味しい新潟の
住みよい生活環境は去りがたい。

偶感

工学部教授
南 一男



大学院自然科学研究科の発足のために赴任したのが昭和61年春だった。新潟は深く雪に埋まった白銀の世界だった。早いもので、あれからもう18年になる。その間に内外で大変な変化が起こった。雪があまり降らなくなった。重苦しい脅威だったソ連が崩壊した。日の出の勢いのバブルがはじけた。希少価値であった博士課程の存在も、大学の自治の象徴であった教授会の性格も変わってしまった。そして今や本学は行方も知らない法人になるうとしている。現在の若い教官を見ると気の毒に思う。以前と違って学務の雑用がやたらに増えてきた。これでは研究をする時間がないだろうと思われる。一方、老兵は消え行くのみである。私は本学で思う存分勉強をさせて頂いた。自分がどれだけ新潟大学に役立ったかは自信がなく申し訳ないが、深く感謝している。学者には2種類あって、年をとると自分の業績に納得する人とそれが出来ない人があるようだ。私は後者であって、まだ心の整理が出来ていない状態である。新潟での生活は、駐車場の心配をしないで自動車で外出できるところがアメリカに似ている。空気も水もお米も美味しい新潟の住みよい生活環境は去りがたい。

雁道（かりみち）

農学部教授
小島 誠



学生時代を加えると本学には実に30年お世話になったことになり。新しく植物ウイルス学を講じることができたことを感謝したい。最後の4年、教養教育で楽しいおもいもさせて貰いました。初夏のとある朝、五十嵐浜へ学生（自由主題学類コロキウム）と出てみた。誰一人としてハマヒルガオの名を知らない。佐渡の島影には足元のハマヒルガオが似合うと教え、一句をものにしてもらった。昼顔といえば飯島晴子の〈昼顔のあれは途方に暮るる色〉の一句を思い出す。省みれば自分はいつも途方に暮れて歩いて来た。他人はいざ知らず自分ではそんな気がしてならない。ともあれ、今日まで歩み続けて来られたことをみなさんに感謝せねばなりません。瞑れば身ほとりに空白感がなくもない。恩師、先輩、同僚、後輩で幽冥界に逝かれた方も少なくない。〈葛の花来るなといったではないか〉晴子の一句は怖い。彼岸から「来るナ！」と言っているのは誰か。お言葉に甘え暫くはそちらには参りませんとおこつて。

〈雁のあめ空には雁の高貴かな〉は先師斎藤玄の佳什のひとつである。雁が渡れば空には高貴な「雁道」が残るというのである。日本へは秋、北から渡って来る。そして春には再び北へと帰って行く。帰るふるさとのない私は此処新潟の地で定住漂泊しよう心に決めている。新生国立大学法人新潟大学の発展と深化を祈念しつつ筆を擱く。永いこと有難度うございました。



帰るふるさとのない私は此処新潟の地で
定住漂泊しよう心に決めている。

退官

平成15年度

新潟大学を去るにあたって

農学部教授
豊田 勝



昭和47年に民間のコンサルタント会社から新潟大学農学部に着任し、以来32年、ただ歳月だけが過ぎ去り定年を迎えることになりました。マンネリ化した講義を改善しなければならないと気付いたのは技術者教育としての改革論議が始まったごく最近のことですし、自分の研究の社会的意義をもっと外部に訴えるべきだったと気付いたのも研究評価用の資料を整備しているときです。対人恐怖症気味の私にとって大勢の人の前で話すことは大変なストレスだったことも原因していますが、組織的な点検・評価がないと怠惰に陥りやすかったことも認めざるを得ません。大学の教員は教育や研究以外にも学内外の各種委員を引き受けなければならないことを知り、任務をできるだけ忠実に果たすよう努めました。しかし、赴任早々にストを実行した職員組合の執行委員、学生からの団体交渉を受けた学務委員など、自分の能力を超えるものが多く、今日に至るまで多くの皆さんにご迷惑をかけ、またお世話になりました。これまでを振り返って感じることは、組織を存続させるには、生物と同様に、相当なエネルギーを要し、不断の点検と改善の努力が必要だということです。外部からのストレスに適応しなければ多分生き残れないことも生物界と同じでしょう。急テンポで進む改革の中で、新潟大学として、また教職員や学生として、貴重な個性を活かして社会的に高い評価を得られますよう祈念いたします。長い間ありがとうございました。

「演習林」退官記

農学部教授
松崎 健



大佐渡山地の北部山稜にある新潟大学の森には、天然の杉が群生している。樹齢数百年の杉の巨木が存在する。尾根には荒涼とした禿斜地も幾箇所があり、その対比もあって、厳しい気象条件下で生育困難な山背の天然林の存在は、訪れる人達に何らかの感動を与える。新大勤務21年間の最後の5年間をこの佐渡演習林で働かせていただいた。予算・組織規模が減少する状況にありながらも、学部内外の多くの関係者の方々のお陰で、知名度も高まり、利用者見学者の数は着実に増加し続けた。世界遺産とまではいなくても「新潟大学遺産」ともいえる佐渡演習林の天然林を永く遺したい。百聞は一見にしかず。出来るだけ多くの人に、「演習林」を体験してもらいたい。しかし、現状では利用限界に近づいている。利用希望時期の集中がある。対応する現地スタッフ数も少ない。林道の補修整備、安全管理には経費がかかる。問題は多いが、全学的視点から解決を望む。

また、佐渡島は、周囲を海で囲まれ、自然環境が独立しているとみなせる。演習林は、島全体を視野に置いた学際的な研究の拠点になりうる。さまざまな分野の研究者が利用できるように総合的な施設の充実をはかってほしい。地域貢献のためにも、佐渡に新潟大学の総合研究所があつていい。演習林が何らかの役割を担える。演習林の発展を期待する。



「新潟大学遺産」ともいえる
佐渡演習林の天然林を永く遺したい。



組織を存続させるには、生物と同様に、相当なエネルギーを要し、不断の点検と改善の努力が必要だということです。